悠々荘

芥川龍之介

　十月のある午後、僕等三人は話し合いながら、松の中の小みちを歩いていた。小みちにはどこにも人かげはなかった。ただ時々松の梢（こずえ）に鵯（ひよどり）の声のするだけだった。

「ゴオグの死骸を載（の）せた玉突台（たまつきだい）だね、あの上では今でも玉を突いているがね。……」

　西洋から帰って来たＳさんはそんなことを話して聞かせたりした。

　そのうちに僕等は薄苔（うすごけ）のついた御影石（みかげいし）の門の前へ通りかかった。石に嵌（は）めこんだ標札（ひょうさつ）には「悠々荘（ゆうゆうそう）」と書いてあった。が、門の奥にある家は、――茅葺（かやぶ）き屋根

の西洋館はひっそりと硝子(ガラス)窓を鎖(とざ)していた。僕は日頃(ひごろ)この家に愛着を持たずにはいられなかった。それは一つには家自身のいかにも瀟洒(しょうしゃ)としているためだった。しかしまたそのほかにも荒廃(こうはい)を極(きわ)めたあたりの景色に――伸び放題(ほうだい)伸びた庭芝(にわしば)や水の干上(ひあが)った古池に風情(ふぜい)の多いためもない訣(わけ)ではなかった。

「一つ中へはいって見るかな。」

僕は先に立って門の中へはいった。敷石を挟(はさ)んだ松の下には姫路茸(ひめじだけ)などもかすかに赤らんでいた。

「この別荘(べっそう)を持っている人も震災以来来なくなったんだね。……」

するとT君は考え深そうに玄関前の萩（はぎ）に目をやった後（のち）、こう僕の言葉に反対した。

「いや、去年までは来ていたんだね。去年ちゃんと刈りこまなけりゃ、この萩はこうは咲くもんじゃない。」

「しかしこの芝の上を見給え。こんなに壁土（かべつち）も落ちているだろう。これは君、震災（しんさい）の時に落ちたままになっているのに違いないよ。」

僕は実際震災のために取り返しのつかない打撃を受けた年少の実業家を想像（そうぞう）していた。それはまた木蔦（きづた）のからみついたコッテエジ風の西洋館と——殊に硝子（ガラス）窓の前に植えた棕櫚（しゅろ）や芭蕉（ばしょう）の幾株（いくかぶ）かと調和しているのに

違いなかった。

しかしT君は腰をかがめ、芝の上の土を拾いながら、もう一度僕の言葉に反対した。

「これは壁土の落ちたのじゃない。園芸用(えんげいよう)の腐蝕土(ふしょくど)だよ。しかも上等な腐蝕土だよ。」

僕等はいつか窓かけを下(おろ)した硝子窓の前に佇(たたず)んでいた。窓かけは、もちろん蠟引(ろうびき)だった。

「家(うち)の中は見えないかね。」

僕等はそんなことを話しながら、幾つかの硝子窓を覗(のぞ)いて歩いた。窓かけはどれも厳重に「悠々荘」の内部を隠していた。が、ちょうど南に向いた硝子窓の

框（かまち）の上には薬壜（くすりびん）が二本並んでいた。

「ははあ、沃度剤（ヨオドざい）を使っていたな。――」

Sさんは僕等をふり返って言った。

「この別荘の主人は肺病患者（はいびょうかんじゃ）だよ。」

僕等は芒（すすき）の穂を出した中を「悠々荘」の後（うし）ろへ廻（まわ）って見た。そこにはもう赤錆（あかさび）のふいた亜鉛葺（とたんぶき）の納屋（なや）が一棟（ひとむね）あった。納屋の中にはストオヴが一つ、西洋風の机が一つ、それから頭や腕のない石膏（せっこう）の女人像（にょにんぞう）が一つあった。殊にその女人像は一面に埃（ほこり）におおわれたまま、ストオヴの前に横になっていた。

「するとその肺病患者は慰（なぐさ）みに彫刻でもやっていた

のかね。」
「これもやっぱり園芸用のものだよ。頭へ蘭（らん）などを植えるものでね。……あの机やストオヴもそうだよ。この納屋は窓も硝子（ガラス）になっているから、温室の代りに使っていたんだろう。」
　T君の言葉はもっともだった。現にその小さい机の上には蘭科植物（らんかしょくぶつ）を植えるのに使うコルク板の破片も載せてあった。
「おや、あの机の脚の下にヴィクトリア月経帯（げっけいたい）の缶もころがっている。」
「あれは細君の……さあ、女中のかも知れないよ。」

Sさんは、ちょっと苦笑(くしょう)して言った。

「じゃこれだけは確実だね。――この別荘の主人は肺病になって、それから園芸を楽しんでいて、……」

「それから去年あたり死んだんだろう。」

僕等はまた松の中を「悠々荘」の玄関へ引き返した。花芒(はなすすき)はいつか風立っていた。

「僕等の住むには広過ぎるが、――しかしとにかく好(い)い家(うち)だね。……」

T君は階段を上(あが)りながら、独言(ひとりごと)のようにこう言った。

「このベルは今でも鳴るかしら。」

ベルは木蔦(きづた)の葉の中にわずかに釦(ボタン)をあらわしてい

た。僕はそのベルの釦へ——象牙の釦へ指をやった。ベルは生憎鳴らなかった。が、万一鳴ったとしたら、——僕は何か無気味になり、二度と押す気にはならなかった。

「何と言ったっけ、この家の名は？」

Sさんは玄関に佇んだまま、突然誰にともなしに尋ねかけた。

「悠々荘？」

「うん、悠々荘。」

僕等三人はしばらくの間、何の言葉も交さずに茫然と玄関に佇んでいた、伸び放題伸びた庭芝だの

干上(ひあが)った古池だのを眺めながら。

（大正十五年十月二十六日・鵠沼）

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房
1987（昭和62）年3月24日第1刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚芥川龍之介全集」筑摩書房
1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月
初出：「サンデー毎日」
1927（昭和2）年1月
入力：j.utiyama
校正：小林繁雄
2005年1月27日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。